

多摩セクション

東京マガジンバンクカレッジ

2018.1
第3号

多摩を歩く～江戸から東京へ散歩～

秋



東京都立多摩図書館

『東京マガジンバンクカレッジ』第3号の刊行にあたって

『東京マガジンバンクカレッジ』第3号は、多摩セクションのイベント「多摩を歩く～江戸から東京へ散歩～秋」(平成29年11月5日実施)にご参加いただいた皆様から原稿をいただき、作り上げた雑誌です。

「多摩を歩く～江戸から東京へ散歩～秋」は東京マガジンバンクカレッジ多摩セクションの講演会「江戸から東京へー多摩万華鏡ー」(平成29年5月28日実施)に参加された方が、講演で紹介された場所を実際に歩いて、学んだ知識を体感したイベントです。しかし、それだけではありません。現地を感じ、体験したことを写真や文章で綴り、さらに何人かの方には編集作業にもご協力いただいて1冊の雑誌にまとめました。

今回の散歩では、玉川上水をたどりつつ、困難な事業を成し遂げた人々の思いに触れていきました。参加者の皆様と一緒に、多摩の歴史の奥深さと散歩の楽しさを味わうお気持ちでお読みいただきたいと思います。

表紙の解説

玉川兄弟像

玉川上水の開削に大きく貢献した、庄右衛門・清右衛門兄弟の像。
昭和33(1958)年に建立。

目次

■ 講師紹介	2
■ 当日の行程	6
■ 当日の地図	8
■ 玉川上水	12
■ 清流の復活	22
■ 武蔵野の新田開発	28
■ 江戸東京たてももの園	34
■ もっと詳しく知りたいときは	40
■ 「東京マガジンバンクカレッジパートナー」の御案内	42
■ 執筆者一覧	43
■ 編集後記	44

講師紹介

多摩を歩く ～江戸から東京へ散歩～ 講師



せん だ なお と
仙田 直人 氏

品川女子学院高等部校長
(前東京都立三鷹中等教育学校校長)

講師コメント

——「多摩を歩く」を振り返って、いかがでしたか？



このように講演会に加え、史跡散歩まで取り入れた企画を実施して頂いた都立多摩図書館には大変感謝しております。夏は「近現代の多摩」を、秋は「近世の多摩」をテーマとして、講演会で話したように、教科書に載る歴史と実際の多摩地区の史跡を結びつけながら歩きました。そのため、市町村単位ではなく、多摩地域全部を視野に入れたことから、九つの市の史跡を横断する広範囲な史跡見学となりました。歩く距離は長くなりましたが、疲れも見せず、拙い私の説明を熱心に聴いて頂いた参加者の皆様には感謝する次第です。

今回の企画を通して、歴史教科書の記述が多摩地域の史跡からでも読み取れ、尚且つそこには様々なドラマがあることを実感して頂けたら幸いです。そして、今回の講座を通して、皆さんの琴線に触れる事項がありましたら、有り難く思います。

そして、その興味を更に深めるため、是非とも図書館を活用して頂けることを心から期待しています。本や雑誌で読んだことを肌で感じた時に歴史の楽しさは広がり、人生の豊かさにも繋がると思います。だから、歴史散歩は止められません。

——11月5日の「多摩を歩く」の中で、特に伝えたかったスポットは、どこですか？



今回の「多摩を歩く」のメインは、何と言っても「玉川上水」です。今回の企画を通して、今から370年以上も前に、約43キロに及ぶ上水をたった8ヶ月で開削した、玉川兄弟を初めとする江戸の人たちのエネルギーを伝えたかったのです。工夫を凝らした投げ渡し堰が設けられた羽村堰、掘替えの苦勞が伺える旧堀跡、新田開発の命とも言わべき分水、今でも残る真っ直ぐな短冊状の新田跡、人の心を今なお和ませる小金井桜などを歩き、様々な顔を持つ上水を実感して貰えたならば有り難いです。

——最後に、参加者の方へのメッセージをお願いします。

疲れも見せず20キロ近くを踏破した参加者の皆様方には、本当にお疲れ様でした。満足して頂けたでしょうか。今度、このような企画がありましたら、今回触れなかった「古代・中世の多摩」を歩きましょう。また、お会いできることを楽しみにしております。有り難うございました。



仙田 直人

講師著作

- 『東京グローバル散歩』（山川出版社 2016）
- 『江戸から東京へ』（東京都教育委員会 2013）
- 『東京多摩散歩 25 コース』（山川出版社 2004）
- 『東京山手散歩 25 コース』（山川出版社 2003）
- 『東京下町散歩 25 コース』（山川出版社 2003）

当日の行程 平成29年11月5日(日)



AM

	8:30	羽村駅 (集合)	↓
	8:50 9:05	禅林寺 (天明義挙の碑) 陣屋門、玉川水神社	
	9:10	羽村堰	
	9:15	玉川兄弟像	
	9:50	加美上水公園 (空堀跡)	
	10:20	田村酒造 (玉川上水通船跡)	
	10:40	福生駅 (JR 青梅線)	
	10:50	拝島駅 (西武拝島線)	
	11:10	玉川上水駅 (昼食)	↓

↓

PM

	11:40	玉川上水駅再集合	↓
	12:00	清流復活の碑	
	12:45	<small>しょうせんじ</small> 小川寺 (小川九郎兵衛墓)	
	12:55	神明宮 (小川村開拓碑) (バス移動)	
	13:25	小平ふるさと村 (バス、徒歩移動)	
	14:40	江戸東京たてももの園 (八王子千人同心組頭の家、 西川家別邸、旧自証院霊屋、 高橋是清邸、八王子の穀倉)	
	16:45	江戸東京たてももの園前 (解散)	

当日の地図 午前



当日の地図 午後



玉川上水



玉川上水



人口増加に拍車がかかり、飲料水不足に直面した江戸時代初期。その対策として、承応元(1652)年、玉川上水開削の計画が立てられました。非常に大掛かりな工事でしたが、承応3(1654)年6月に竣工し、飲料水の供給以外にも、武蔵野台地の村々に生活用水・灌漑用水としても分水され、新田開発に重要な役割を果たしました。

前略 玉川兄弟様

これまで何度も訪れている『羽村取水堰』に、また縁あって、行かせていただきました。庄右衛門さん清右衛門さんの銅像にも、勿論おあいしてきました。測量の技術に秀でていたとはいえ、高低差のほとんどない土地に、自然流下式の用水を、短期間にしかも約43kmにわたり、掘り進めるのは、本当に並大抵なことではなかったですよ。まずは、取り入れ口の決定、大岩や水喰土の回避等で、途中資金も底をついてしまったのですよね。でも、決してあきらめなかった！ 難工事を終え、苗字帯刀を許されたものの、玉川家の繁栄はなかったと、文献で目にしたことがあります。会津の鶴ヶ城で、玉川上水の記述を見た時には、勝手に誇らしかったです。玉川様は、今の世の源を作った英雄という思いで、またお二人の銅像を見上げにいきます。

池田 雅子



ちよつと寄り道

中里介山について



『大菩薩峠』の著者である中里介山は明治18年に羽村堰近くの農家に生まれました。小学校を卒業後、家族を養うために電話交換手や小学校の代用教員などをしながら独学で勉強を続けました。

その後上京し、都新聞社に入社した介山はその才能を開花させ次々に作品を発表し、ついに『大菩薩峠』の連載を始めます。連載が好評を博すと、介山は執筆に専念するため再び多摩へ戻ります。多摩地域を転々としながら執筆を続け、晩年は故郷の羽村で農業経営と村塾経営に情熱を傾けました。

介山は個人雑誌『峠』に羽村堰前方の多摩川の写真とともに「わが古さと」と題した以下の文を寄せています。
「これは わがふるさとである 前の丘陵は 秩父山脈の餘派で
その下を 流れてゐる川は 多摩川である 多摩川も此處で 堰
かれて 上水となつて 江戸以来の 帝都の人の生命 となる。
(以下略)」

介山にとって故郷といえば豊かな水を湛える多摩川のことだったのかもしれませんが。

人生のほとんどを多摩地域で過ごした介山は昭和19年にその人生を閉じました。遺骨は禅林寺の境内裏手に埋葬されています。未完の大作『大菩薩峠』の結末を想像しながら訪れてみてはいかがでしょうか。



現在玉川上水沿いに住み、遊歩道の四季折々の美しい自然に癒される毎日です。仙田先生のお話を伺いながらの散策は、とても興味深いものでした。羽村堰は二度目ですが、第一、第二水門の、鉄や丸太、砂利を利用して作られている仕組は、基本的に当時のものと変わらないとのこと。測量技術や機材も現代と格段に違う中での、四谷大木戸43km、高低差100mの半年の工事。360年以上前の江戸の先人達の知識と苦労が、大いに忍ばれました。その後、茫漠たる原野武蔵野台地は、次々と新田開発が進みました。我が家の周辺にも小川榎戸等、新田に因む地名が残ります。名前の由来にも思いを馳せながら、歴史ある玉川上水を改めて大切にしていきたいと考えました。

Y.O



台風の名残りで荒れる多摩川から分かれ、水はゆったりとした流れに変わっていた。

360年前、ここから「四ッ谷内藤新宿大木戸」までの43キロを、人手のみで築き、たった8ヶ月間で通水させたという玉川上水。しかも一段と高台にある、武蔵野の分水嶺を縫って。

指揮した玉川兄弟とは、どのような人達だったのだろうか。

椎や櫨の実を踏みしめ、上水脇の道に行く。

水路は意外と深い。

見上げると、林のように続く木々の葉が色付き始めていた。

あの日、武蔵野夫人達は、この様な道を彷徨ったのだろうか。

水は葉脈の様に細分し、水車を回し、台地を潤し、豪農も生んだ。

付け書院のある茅葺農家から、見学の子供たちの歓声が漏れてきた。

嘗て、この屋ではどのような声が、響いていたのだろうか。

書を求め、そろそろ図書館へ戻ろうか、と・・・？

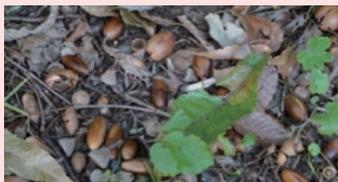
河西 裕



小金井市指定有形文化財 吉野家



玉川上水 羽村取水堰



玉川兄弟の像



玉川上水 遊歩道

11月5日、『江戸から東京へ散歩 秋』に参加しました。

企画された都立多摩図書館の担当の方々や、講師の仙田先生にはいつも大変にお世話になり、有り難うございました。

私は高校生の時から、50年近く玉川上水沿いの遊歩道近くに住んでいます。

四季折々に変わる樹々の表情を毎日眺めながら、豊かな自然の中に暮らす幸せを感じています。

今回のイベントは、その玉川上水の取水口から流れに沿って歩くというもので、日ごろ身近ではあっても知らないことの多い上水を知る良い機会になりました。

1653年4月から取水堰の工事を始めて、8ヶ月後(閏月を含む)の11月には四谷大木戸までの水路43kmを完成させたそうです。

順次工事を進めたのではなく、何か所かで同時進行を進めたようです。その為には測量の技術が相当に優れていなければなりません。玉川兄弟はどのようにしてその技術を習得したのかと、新たな疑問も生じました。

玉川兄弟の銅像は、何回か見っていますが、片膝をたてた弟の清右衛門が持っているのが測量棒、後ろに立っている兄の庄右衛門が持っているのが測量綱であると、初めて気が付きました。とにかく現場で話を聞くと、驚きも感激も深く、充実した一日でした。

上岡 和江



羽村取水堰より多摩川左岸を下流に下ると玉川上水の間の利用可能な平地(旧河川敷を用水開削土砂で嵩上げ?)が広がり、地図上では最大幅約180mで、加美上水公園では逆に約110mまで狭くなる。仙田先生の現地レクチャーの玉川上水を東に40m付け替えた箇所である。河川敷は、グラウンドやマンション、戸建住宅、コンクリート工場、特養ホームに利用されている。福生市の都市計画図には、加美上水公園より多摩川左岸沿いに「砂利線跡」の表示があった。「青梅線福生河原支線」の廃線跡で、福生駅から砂利採石場までの1.8kmを昭和2年から34年まで運行されていた。当日散策した場所をかつて砂利満載の貨車が横切っていたシーンを想像すると急に臨場感がある。

小林 圭介

奥多摩街道から多摩川を覗くと、そこに無造作にその遺構は佇んでいる。「羽村取水堰」眼前に広がるそのスケール感に圧倒される。承応2(1653)年、江戸の人口増加に伴う水不足解消の為、幕府から工事を請け負った玉川庄右衛門・清右衛門兄弟の尽力で玉川上水が造られた。羽村取水堰は多摩川の水を取り入れる為に上水開削時に設置され、全長約380mの投渡堰と固定堰で構成される。1911(明治44)年に改築され、現在は木製からコンクリート製となっている投渡堰であるが、堰の仕組み自体は江戸時代から基本的に変わっておらず、当時の技術の高さを物語る。江戸時代にはその景観の美しさから「羽衣の堰」と呼ばれ、現在は新東京百景にも選定されている。一見の価値あり。

ケンケン



水喰土公園



今回の散歩で訪れることができませんでした。玉川上水と関係が深い場所に「水喰土公園」があります。この水喰土公園は福生市熊川地区の、玉川上水にかかる五丁橋の近くに位置しています。

玉川兄弟は、玉川上水を完成させるまでに開削工事を2度失敗しています。その2回目の工事を中断した場所が、ここ水喰土公園といわれています。伝説によると、四谷まで堀を完成して水を流すと、熊川村の水喰土というところで、ことごとく地中に吸い込まれてなくなってしまった、といわれています。その伝説を裏付けるかのように、この公園には開削工事跡と思われるくぼみがあります。福生市が1990年に公園として整備したため、公園内にある約40メートルの空堀を今でも見ることができます。

また、大幅な堀替えを余儀なくされたため、新たな堀割工事に従事させられた村民の苦難の思いが「みずくれえど」の俗称となり「水喰土」という地名として定着した、という説もあります。

玉川兄弟の苦勞をしのぶべく、一度訪れてみてはいかがでしょうか。



この度の、上水の開削や新田開発を行った江戸時代の多摩地域を体感するという企画は、私には久しぶりの川との出会いでした。長年、山登りをやってきた私としては、多摩川の源流(笠取山)では散々遊んできたものでした。

その時から、ここが東京都の重要な上水道水源であることを聞かされていました。

その多摩川は1653年、ここ羽村での掘り割り工事で取水され、一年後に江戸の四谷大木戸までの43kmを、武蔵野を延々と流れることとなったのです。

羽村堰から四谷大木戸までの高低差92m、100mにつき21cmとのこと。

この水路を開削したのが後にこの功績により玉川姓を与えられた庄右衛門と、その弟清右衛門。

仙田先生からは先ず、そんなお話をいただきました。

羽村堰での多摩川との出会いは、迫力ある川の流れに、よく「あの一滴」が、ここまで無事に来れましたね、っという感慨にとらわれもしました。

しかしまあ、この玉川上水を開削した玉川兄弟の苦勞たるやいかなるものであったであらう。

地面に水が吸い込まれてしまうところや、工事の途中岩盤に当たってしまったこともあったとか。

玉川上水は江戸に飲料水を運んだだけでなく、分水を引くことで飲料水の確保が難しかった武蔵野に多くの村が開かれたそうです。

興味深い旅でした。

ありがとうございました。

近々に四谷大木戸を訪ねたいと思います。

土竜